

書名：時間の比較社会学

①

著者：真木悠介

出版社：岩波書店 出版年月：2003年8月

総ページ数：331ページ

書名：地球時代の民族＝文化理論

②

著者：西川長夫

出版社：新曜社 出版年月：1995年10月

総ページ数：224ページ

書名：新しい世界史

③

著者：マルク・フェロー

訳者：大野一道

出版社：新評論 出版年月：1985年10月

総ページ数：484ページ



推薦者

梅津正美

鳴門教育大学副学長

～授業づくりのための読書～

私の専門である社会科教育学の立場から読書を論じる場合、中心的な問いは、「社会科授業づくりのために、本をどう選び読むか」ということになる。結論を先に述べれば、社会科授業づくりに活かすように、教科の性格や目標を視点に本を選び読み込むことが大切である。社会科教育の主要な目標は、子ども達に、物事を多面的・多角的に考察し、公正に判断する能力と社会的な見方・考え方（社会認識）を形成することである。読書は、こうした社会的な能力や認識の形成につながる「問題－回答－事例の関係」をつかむように行うのである。以下で紹介する3冊の書物は、社会科教育の性格や目標を実現する授業づくりのために有用であると考え選んだ。

①は、時間（意識）の見方・考え方について論じている。本書を貫く問いは、近代社会は、時間を不可逆的な直線と数量に還元することであらゆる質的に異なった世界を通約することを可能にしてきたが、果たして時間は客観的存在として感覚できるのか。市民は時間による管理と自己疎外や、時間に対する虚無感に対抗できるのか、というものである。この問いに対する回答の方法として、まず、歴史における時間意識を、「線分的な時間」（ヘブライズム）、「直線的な時間」（近代社会）、「反復的な時間」（原始共同体）、「円環的な時間」（ヘレニズム）に四分する。その上で、「不可逆性としての時間観念」をヘブライズムに、「量としての時間観念」をヘレニズムに求め、それぞれの要因が存在しない社会の時間意識と比較する方法で、市民が近代的時間意識がもたらす問題性を克服していくための視点を提示していく。本書が示唆することは、時間の質的な違いや多元性を認識した上で、自己の「生」に意味を与える時間の意識を自分なりに見出していくことの重要性である。

②は、モノ・ヒト・コトのグローバル化が急速に進む今日、国家・国境を超えた文化形成のあり方について述べている。異文化にある市民同士が「地球市民」になることは可能なのだろうか。この問いに対する本書の回答は明快である。文化相対主義は、本来「文化に対する価値判断」という概念を内包していないために、多様性や寛容の裏返しとして容易に同化や隔絶を容認できる枠組みとなる。地球時代の新しい文化理論は、交流、変容、関係性をキー概念に、文化葛藤と正対し、文化をめぐる個々の問題場面において、状況の解決により望ましい価値基準を議論を通じて創り出していく「能動的モデル」として構想せねばならない。「地球市民」は実体概念というより方法概念である、と論じている。

③は、欧米のみならず第三世界をカバーする豊富な国・地域の歴史教科書の分析を通して、市民としての史観形成のあり方を問題にしている。歴史教科書は「制度の歴史」を記述する。その記述は、しばしば特定の国や集団の「勝者」（支配者）の政策やイデオロギー、体制を正当化することを目的としている。こうした記述を「歴史」というのであれば、「反歴史」、即ち「支配の歴史」に対する「被支配の歴史」も正当に記述されねばならない。しかしその場合、「反歴史」も「制度の歴史」になり得ることを見抜かねばならない。つまり、支配、被支配の側を問わず、「体制」を価値的に正当化することを与えられた目的とする歴史記述は、歴史イデオロギー注入の道具となるのである。著者が史観形成のためにその必要性を説く「歴史話法の客観化」とは、イデオロギーから解放された市民による主体的な歴史解釈の健全なせめぎ合いの過程にほかならない。

